



Title	コミュニカティブ・アプローチ再考：伝統的アプローチとの融合をめざして
Author(s)	西口, 光一
Citation	日本語教育. 1991, 75, p. 164-175
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/25291">https://hdl.handle.net/11094/25291</a>
rights	©日本語教育学会
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# コミュニカティブ・アプローチ再考

## ——伝統的アプローチとの融合をめざして——

西 口 光 一

(1991. 5. 30 受)

### 要 旨

コミュニカティブ・アプローチは、コミュニケーション能力の養成という教育目標とコミュニケーション的言語観というものを共有する2種類の外国語教育革新運動の統合体（あるいは融合体）であると見ることができる。その一つは教育内容を改訂することにより教育を改善していこうという内容的アプローチであり、いま一つは教育方法を革新することにより目標言語の技能や運用能力を養成することに主眼を置く方法的アプローチである。コミュニカティブ・アプローチと従来の日本語の教授方法の融合を図るためには、両者の特質を各々明らかにした上で、教授理論、シラバスの策定、コース・デザイン、指導方法の各側面で両者の融合の方向を探っていかなければならない。

【キーワード】 コミュニカティブ・アプローチ、内容的アプローチ、方法的アプローチ、シラバス・デザイン、革新的な教授方略

### 1. はじめに

「日本語教育」第73号ではコミュニカティブ・アプローチをめぐるさまざまな議論が展開され、また、実験や実践の報告が行われた。しかしながら、コミュニカティブ・アプローチと従来の日本語の教授方法とが発展的に融合していく方向をめざした議論は行われなかった。両者がそのような方向に進んでいくためには、そのような観点から改めて各々を正確に捉えなければならない。本論では両教授方法の融合の可能性を探るための資料を提供することを目的として、改めてコミュニカティブ・アプローチの実体に迫る。

### 2. コミュニカティブ・アプローチの基礎

コミュニカティブ・アプローチとはどのような教授方法かと尋ねられた時、それはコミュニケーション能力を養成することを目標とする教授方法である

という点ではほとんどの研究者の間で見解の一致を見る。しかし、それ以外の部分では、さまざまな研究者がさまざまな要素を挙げ、その結果コミュニケーション・アプローチの実体はひじょうに捉えにくくなっている。しかしながら、これまでに行われているさまざまな議論を注意深く検討してみると、コミュニケーション・アプローチは教育目標と言語観を共有する2種類の外国語教育革新運動の統合体（あるいは融合体）であると見られるようである。

#### (1) コミュニケーション能力の養成

コミュニケーション・アプローチによる外国語教育の革新運動はその総体として、それまでの外国語教育に目標と言語観の点で根本的な見直しを迫ったことは疑いない。それまでの外国語教育では、たとえスローガンとしてはコミュニケーション能力を養成すると言っている、実際のところは音声面も含めて正しい文を構成する能力を養成することに主眼が置かれていた。1970年代になってさまざまな言語研究者が、文法能力（あるいは言語能力）だけでは言語コミュニケーションは可能にならないことを指摘しはじめた。以後、幾多の議論を経て言語コミュニケーションを可能にする能力を指す言葉としてコミュニケーション・コンピテンス (communicative competence) という用語が定着し、現在その内容についてもかなりの合意ができています。コミュニケーション・アプローチのはっきりとした特質の一つはそのようなコミュニケーション・コンピテンスの習得を教育目標としていることである。

1965年に出版された “Aspects of the Theory of Syntax” で Chomsky は、人間の言語に関わる能力に関して言語能力 (competence) と言語運用 (performance) を区別した。Chomsky によると言語能力とは “the speaker-hearer’s knowledge of his language” で、言語運用とは “the actual use of language in concrete situations” である。これに対し Hymes (1971) は、言語理論には言語の社会文化的な要因も含まれるべきであると主張し、「能力」と「運用」の区別は厳密に「潜在的な能力」(underlying competence) と「実際の運用」(actual performance) の対照とすべきであるとした上で、話し手がもつ潜在的な言語使用の能力は Chomsky のいう言語能力だけにとどまるものではなく、言語の使用方法に関するものも含まれなければならないと主張し、彼の言うコミュニケーション・コンピテンスの内容を示した。それ以降コミュニケーション・コンピテンスの内容に関する部分的な議論また包括的な議論が盛んに行われたが<sup>(1)</sup>、Canale and Swain (1980) により一つの到達点に至った。さらに続いて発表された Canale (1983) により、われわれ

は彼らが携わったフランス語教育で彼らが教育と評価のための基礎としたコミュニケーション・コンピテンスの内容を知ることができる。コミュニケーション・アプローチの流れを汲んで米国内で発展しつつあるプロフィシエンシー主導の指導法(Proficiency-oriented instruction)では訓練すべき能力を運用能力(proficiency)として動態的に捉え、それを4技能にわたって各学習段階別に詳細に記述し、そこで特定された運用能力の養成をめざして教育が行われる(cf. O'Maggio 1986)。

## (2) コミュニケーション的言語観

コミュニケーション・アプローチに関してもう一つの一貫した特質と見られるのは、従来の構造中心の言語観に対立するコミュニケーションの観点からの言語観である。Richards and Rodgers (1986) はコミュニケーション・アプローチの言語観をコミュニケーション的言語観(communative view of language)と呼び、四つの特徴を挙げている。これに Breen and Candlin (1980), Widdowson (1983), Savignon (1983) らが指摘する言語コミュニケーションの交渉過程的な特徴を加えると、以下のような五つの特徴を得る。

1. Language is a system for the expression of meaning.
2. The primary function of language is for interaction and communication.
3. The structure of language reflects its functional and communicative uses.
4. The primary units of language are not merely its grammatical and structural features, but categories of functional and communicative meaning as exemplified in discourse.
5. Communication is a continuous process of expression, interpretation and negotiation of meaning.

このような言語観が、コミュニケーション・コンピテンスと並んで、コミュニケーション・アプローチのあり方の基礎となっている。

## 3. コミュニケーション・アプローチの二つの流れ

先に、コミュニケーション・アプローチは教育目標と言語観を共有する2種類の外国語教育革新運動の統合体(あるいは融合体)ではないかと述べた。その2種類の革新運動とは何か。

一般に教育を改善するためには大きく言って二つの方法が採られる。一つ

は、教育目標あるいは指導内容を、社会の要請や学習者の必要性また教育内容の研究の発展等の観点から、より妥当なものにするという方法(cf. Scriven: 1967)で、いま一つは、教育方法を改善する方法である。コミュニケーション・アプローチの外国語教育革新運動はこの二つの(異なる、しかし並立し得る)方法により行われていると見ることができる。

すなわち、一つは指導内容の改訂すなわち学習言語事項(シラバス)を見直して学習者のニーズや現在の言語理論により合致した内容を提供することにより教育を改善しようというアプローチである。本論ではコミュニケーション・アプローチの中のこのような革新運動を内容的アプローチと呼ぶことにする。この中には機能-概念アプローチ(Functional-Notional Approach)や初期の特殊目的のための外国語教育が含まれ、また、さまざまなシラバス・デザインやコース・デザインの研究や実践もこの教育革新運動の流れの中に位置づけられる。いま一つは、指導方法の革新により目標言語の技能や運用能力を養成するという点に主眼を置いた革新運動である。各種の革新的な教授方略はそのような流れの中で発展したと見ることができる。先の内容的アプローチに対してこれを方法的アプローチと呼ぶことにする。

#### 4. 内容的アプローチ

##### (1) 起源

内容的アプローチの出発点となったのは、ヨーロッパ協議会(Council of Europe)のユニット・クレジット・システム(unit-credit system)の開発である。このシステムの開発は内容的アプローチの三つの特徴を全て有している。

第一に、同システムの開発では、学習者がどのような場面でどのような意味を伝達するかをシラバス策定の出発点としたことである。いわゆるニーズ分析の考え方である。

第二の点は、従来のように目標言語の基本文型、基礎的文法事項や基本語彙を配列してシラバスを作成することをせず、学習者が表現したり理解したりする意味をもとにシラバスを策定したことである。当初 Wilkins は意味のカテゴリーとして意味・文法カテゴリー(semantico-grammatical categories)と伝達機能のカテゴリー(categories of communicative function)を提出していたが、後に Wilkins の考え方をもとに作成された一般学習者のための最低学習レベルとしてのスレシヨールド・レベル(Threshold Level)ではそれ

らが概念 (notion) 及び機能 (function) と改められ、ここに概念-機能シラバスが誕生した。

第三の点は、これは第一の点と直接関連することだが、ユニット・クレジット・システム開発時には、一般目的のための外国語教育 (Language for General Purpose, 以下 L G P と略す) と特殊目的のための外国語教育 (Language for Specific Purposes, 以下 L S P と略す) という考え方が明確に打ち出されていたことである。同システムでは前者を共通核 (common core) と呼んでおり、その部分は学習者の専門や職業に関わりなく選択することになる。そして、その一方で各学習者は個別的なニーズに対応する部分として L S P のユニットを選択するわけである。

ユニット・クレジット・システム開発の一方で、リーディング、リスニング等の技能の訓練をめざした L S P も既に発展しつつあった。しかし、この場合も、当初は当該の分野や領域に特有の言語事項のレパートリーの割り出しと提示に革新の焦点が置かれていたという点で、やはりここに言う内容的アプローチの範ちゅうに含めることができる<sup>(2)</sup>。

## (2) 発 展

このような形で出発した内容的アプローチは英語教育の中ではまたたく間に外国語教育の新しい「標準」となり、その後に開発された L G P の教科書のほとんどはスレショールド・レベルに準拠して作成された。一方、L S P の分野では、Munby の “Communicative Syllabus Design” (Munby: 1978) がシラバス・デザインのバイブル的な資料となり、その手法に基づいて（あるいはそれを参考にして）各所でさまざまな L S P の教材やプログラム開発の試みが行われた。

内容的アプローチはコミュニケーションの観点からのシラバスの再検討から始まったが、その後は革新の範囲を徐々に広げ、最終的には教育のデザイン全般をその領域に収めるようになった<sup>(3)</sup>。コミュニケーション・アプローチの実体が捉えにくくなっている原因の一つはこの点にあると思われる。

## (3) 内容的アプローチの指導方法

内容的アプローチの主眼は、教える内容を学習者のコミュニケーション・ニーズに対応するように選定することにより学習者が必要とするコミュニケーション能力を身につけさせるというところにある。それゆえ、その主要な成果は、従来の言語構造の観点から割り出された学習言語事項に対して、学習者が表現したり理解したりする意味に対応した「新しい学習言語事項」を

提出するという形で出された。しかし、指導方法に関しては根本的な革新は提案していない。内容的アプローチの指導法については、Van Ek and Alexander (1980 : 246-251), Alexander (1981 : 16-17), Morrow (1981 : 52-66), Littlewood (1981) 等で論じられているが、その指導方法の実際をもっとも端的に示していると思われるのは Finocchiaro and Brumfit (1983 : 90-112) である。

これらの資料や文献を見ればわかるように、場面や発話意図やコンテキストまた学習者の動機づけ等に配慮しながら指導が展開されているとはいえ、内容的アプローチの指導法は言語事項の習得に主眼を置いているという点では従来の指導法と根本的な差はないと見ることができる。そして、そこでは当然文法的に正しく (grammatically correct), 社会言語学的に適切な (socio-linguistically appropriate) 言語事項が教授される。これに対し、次節で論じる方法的アプローチの各種の教授方略は、言語事項を学習させたり特定の言語事項を使う能力を習得させたりしようとするものではなく、目標言語の技能や運用能力を養成しようとするものである。

## 5. 方法的アプローチ

方法的アプローチは指導方法の革新により目標言語の技能や運用能力を養成するという点に主眼を置いた外国語教育革新運動である。その指導方法は特定の言語事項の習得をめざすものではなく、複合的あるいは創造的な言語能力の養成をめざすものである。ゲーム、ロール・プレイ、ディスカッションやシミュレーション、さらにはプロジェクト・ワーク、また、タスク中心のリーディングやリスニングの教材はこの流れの中で生まれた新しい教授方略である。それらの教授方略の基礎となっている原理を Richards and Rodgers (1986 : 72) は次のように整理している。

### 1. Communication Principle

Activities that involve real communication promote learning.

### 2. Task Principle

Activities in which language is used for carrying out meaningful tasks promote learning.

### 3. Meaningfulness Principle

Language that is meaningful to the learner supports the learning process.

方法的アプローチの教授方略の指導原理を簡潔に言うと、実際のコミュニケーションを実際のコンテキストに近い形で模擬演習する(simulate)ことにより言語能力の発達が促進されるというものである。一方、方法的アプローチは本質的にニーズ分析や学習言語事項の見直しとは関わりがない。また、内容的アプローチで文法的な正しさと社会言語学的な適切さが本来的に追求されるのに対し、方法的アプローチでは、どのようにして学習者を現実的なコミュニケーションのコンテキストの中に投入するかという点に意が払われ、また、指導の中で正確さ(accuracy)と流ちょうさ(fluecy)をどのようにバランスするか、コミュニケーション・ストラトジーの使用をどの程度奨励または抑制するか、といったことが問題とされる。

方法的アプローチの各種の教授方略と内容的アプローチの指導方法を比べた場合、前者の方がはるかに「革新的」である。それゆえコミュニケーション・アプローチの外国語教育革新運動の中で教授方法として外国語教師の注目を集めたのは前者である。そのようなことから外国語教師の間では方法的アプローチの各種の教授方略こそがコミュニケーション・アプローチの教授法であるとする傾向がひじょうに強かった。そして、それが本来的に適していないにもかかわらず、方法的アプローチの教授方略を内容的アプローチの中の言語事項の指導にまで適用しようとする傾向さえあった。このように方法的アプローチと内容的アプローチを戴然と区別しなかったところに、コミュニケーション・アプローチに関する混乱や誤解の原因があるのではないかと思われる。

## 6. まとめと今後の課題

以上の議論をまとめると表1のようになる。

さて、コミュニケーション・アプローチと従来の日本語の教授方法の発展的融合のために今後我々は何をなさねばならないか。

まず最初に本論でコミュニケーション・アプローチについて再考したように、従来の日本語の教授方法の特質も改めて明らかにされなければならない。伝統的な日本語の教授方法はパーマーのオーラル・メソッドの流れを汲む実践的な「直接法」である。Richards and Rodgers (1986) は、実践主義的な教師の直感に合致するが故に現在でも広く行われているこのような教授方法を場面的教授法(Situational Language Teaching, 同書第3章)と呼び、その教授方法の特質を体系的に記述している。筆者自身はその実践経験と文献研



表1 内容的アプローチと方法的アプローチ

革新運動の種類	内容的アプローチ	方法的アプローチ
教育目標の重点	コミュニケーションの観点から割り出された言語事項の習得	技能及び言語運用能力の養成
教育内容	学習者のニーズから割り出された言語活動場面で使われる機能、概念を実現する言語事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な言語運用能力</li> <li>・各種の言語技能</li> </ul>
指導方法	場面、コンテキスト、学習者の動機づけ等を配慮したコミュニケーション的な言語事項の指導法	ロール・プレイ、シミュレーション、プロジェクト・ワーク等の実際的なコミュニケーションをシミュレートする教授方略
指導方法で追求される点	いかに“コミュニケーション”に言語事項を指導するか	いかに学習者を現実的なコミュニケーションのコンテキストに投入するか

究の結果から見て、Richards and Rodgers の場面的教授法の記述を伝統的な日本語の教授方法の説明と見て間違いないと考えているが、やはり伝統的な日本語の教授方法を経験してきた日本語教育の専門家自身による日本語の教授方法の明確な解説を期待したい。

さて、各々の教授方法が明確にされたら、次に今後の教授計画の基礎となる第二言語の学習と教授に関する仮説を明らかにしなければならない。これがその後の全ての意思決定の土台となる。そして次に、各学習段階別に教育内容と教育方法の検討に入る。学習段階あるいは学習者の言語能力の発達段階を考慮せずして、一般論で教育内容や教育方法を議論することはほとんど意味がないと思われる。そのような作業をするにあたっては、次のような点が留意されるべきであろう。

1. コースの策定に際しては、一般目的のための日本語（JGP）の部分と特殊目的のための日本語（JSP）の部分をはっきりと区別する。JGPの部分では特に、学習者の日本語能力の「健全な発達」を考慮したコースを策定する。そしてその中で機能、概念に対応する文型と文法的観点からの文型文法事項の融合を図る。

2. 言語能力の発達という観点から、言語事項（文法的観点からの言語事項とコミュニケーションの観点からのものの両方及び語彙を含む）の習得と技能及び総合的な運用能力の開発の両者のバランスを十分に考慮してコース・デザインを行う。言語事項習得のための指導だけでは、学習者自身が自主的に教室外で日本語による言語活動を行わない限り技能や総合的な運用能力が身につくとは思えない。一方で、技能及び総合的な運用能力の訓練だけで、言語事項を追加していくことをしないならば、当初は能力が伸びるとしても、やがて能力伸張の限界が来ると思われる。また、指導の内容として、学習の初期は言語事項習得のための指導が授業の大部分を占め、徐々に技能や運用能力の訓練が増えていき、学習の完成期には技能や運用能力の訓練が大勢を占めるようになるであろうということは十分に予想される。

3. 指導方法については、まず学習課題（文法的観点からの文型・文法事項の習得、コミュニケーションの観点からの機能や概念に対応する文型の習得、特定の言語行動能力の養成、特定の技能の訓練、総合的な運用能力の開発等）を明らかにし、各々の学習課題を達成するためにはどのような指導方法が適切であるかを検討する。学習課題を明らかにせずして指導方法のみを論じるのは不毛である。

Richards and Rodgers (1986: 83) が “Now that the initial wave of enthusiasm has passed,…” というように、我々はこれまでの熱気を冷まして、冷静になって将来の日本語教育の礎を築くべき時期にきているのではないだろうか。

#### 注

- (1) Canale (1983), Munby (1978), Savignon(1983), Brown(1987)等を参照。また、一方でコンピテンスとパフォーマンスというこの二分割法に関しても、Canale (1983), Breen and Candlin (1980), Widdowson (1982, 1983), などが興味深い議論を展開している。それらの議論の趣旨は、コンピテンスは実は、実際のコミュニケーションを可能にする潜在的な知識と、具体的なコミュニケーション場面の中でそこに存在する関連要因を判断し、それに応じてこの知識に働きかけ必要な知識を検索したり操作したりして実際の行動を生成するプロセス的な能力の二つの部分に分けられるのではないかというものである。このような能力を Canale は skill, Breen and Candlin は ability, そして Widdowson は capacity とそれぞれ呼んでいる。

- (2) この種のLSPは間もなく、さまざまな教授手法を駆使して技能を技能として訓練しようという方向への発展を見せ、内容的アプローチの一つというより次節で論じる方法的アプローチの領域の方に入っていくと見るべきである。LSPに関しては、Robinson (1980), Widdowson (1978, 1979, 1983), Grellet (1981), Ur (1984), Trimble (1985), Dubin, Eskey and Grabe (1986), Hutchinson and Waters (1987) 等を参照。
- (3) Yalden (1983), Dubin and Olshtain (1986), Yalden (1987), Hutchinson and Waters (1987), Nunan (1988), Nunan (1989) 等を参照。

#### 参考文献

- (1) Alexander, L. (1981) "Teaching adult beginners." In Johnson, K. and Morrow, K. (1981: 16-17).
- (2) Breen, M.P. and Candlin, C.N. (1980) "The essentials of communicative curriculum in language teaching." *Applied Linguistics* 1-2: 89-112.
- (3) Brown, H.D. (1987) "Principles of Language Learning and Teaching." Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- (4) Brumfit, C.J. and Johnson, K. (eds.) (1979) "The Communicative Approach to Language Teaching." Longman.
- (5) Canale, M. (1983) "From communicative competence to language pedagogy." In Richards, J.C. and Schmidt, R.W. (1983) "Language and Communication." Longman.
- (6) Canale, M. and Swain, M. (1980) "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing." *Applied Linguistics* 1-1: 1-47.
- (7) Chomsky, N. (1965) "Aspects of the Theory of Syntax." Cambridge, Mass.: The M.I.T. Press.
- (8) Dubin, F., Eskey, D.E. and Grabe, W. (1986) "Teaching Second Language Reading for Academic Purposes." Reading, Mass.: Addison-Wesley.
- (9) Dubin, F. and Olshtain, E. (1986) "Course Design." Cambridge: Cambridge University Press.
- (10) Finocchiaro, M. and Brumfit, C. (1983) "The Functional-Notional Approach —From Theory to Practice." Oxford: Oxford University Press.
- (11) Grellet, F. (1981) "Developing Reading Skills." Cambridge: Cambridge University Press.
- (12) Hutchinson, T. and Waters, A. (1987) "English for Specific Purposes; A Learning-Centered Approach." Cambridge: Cambridge University Press.

- (13) Hymes, D. (1971) "On communicative competence." In Pride, J.B. and Holmes, J. (eds.) (1972) "Sociolinguistics." Penguin. Also in Brumfit, C.J. and Johnson, K. (eds.) (1979).
- (14) Johnson, K. and Morrow, K. (eds.) (1981) "Communication in the Classroom." Longman.
- (15) 木村宗男他編 (1989) 日本語教授法 桜楓社
- (16) Littlewood, W. (1981) "Communicative Language Teaching—An Introduction." Cambridge : Cambridge University Press.
- (17) Morrow, K. (1981) "Teaching the 'general' student." In Johnson, K. and Morrow, K. (1981 : 52-66).
- (18) Munby, J. (1978) "Communicative Syllabus Design." Cambridge : Cambridge University Press.
- (19) Nunan, D. (1988) "The Learner-Centered Curriculum." Cambridge : Cambridge University Press.
- (20) Nunan, D. (1989) "Designing Tasks for the Communicative Classroom." Cambridge : Cambridge University Press.
- (21) O'Maggio, A.C. (1986) "Teaching Languages in Context; Proficiency-Oriented Instruction." Boston, Mass. : Heinle and Heinle.
- (22) Richards, J. and Rodgers, T. (1986) "Approaches and Methods in Language Teaching." Cambridge : Cambridge University Press.
- (23) Robinson, P. (1980) "ESP (English for Specific Purposes)" Oxford : Pergamon Press.
- (24) Savignon, S.J. (1983) "Communicative Competence : Theory and Classroom Practice." Reading, Mass. : Addison-Wesley.
- (25) Scriven, M. (1967) "The methodology of evaluation." In Tyler, R., Gagne, R. and Scriven, M. (eds.) (1967) "Perspectives of Curriculum Evaluation." AERA Monograph Series on Curriculum Evaluation, No. 1.
- (26) Trimble, L. (1985) "EST: A discourse approach." Cambridge : Cambridge University Press.
- (27) Ur, P. (1984) "Teaching Listening Comprehension." Cambridge : Cambridge University Press.
- (28) Van Ek, J.A. and Alexander, L.G. (1980) "Threshold Level English." Oxford : Pergamon Press.
- (29) Widdowson, H.G. (1978) "Teaching Language as Communication." Oxford : Oxford University Press.

- ⑩ Widdowson, H.G. (1979) "Explorations in Applied Linguistics." Oxford : Oxford University Press.
- ⑪ Widdowson, H.G. (1983) "Learning Purpose and Language Use." Oxford : Oxford University Press.
- ⑫ Widdowson, H.G. (1984) "Explorations in Applied Linguistics 2." Oxford : Oxford University Press.
- ⑬ Wilkins, D.A. (1976) "Notional Syllabuses." Oxford : Oxford University Press.
- ⑭ Yalden, J. (1983) "The Communicative Syllabus : Evolution, Design and Implementation." Oxford : Pergamon Press.
- ⑮ Yalden, J. (1987) "Principles of Course Design for Language Teaching." Cambridge : Cambridge University Press.

(ハーバード大学)